

座右の銘

課題を先延ばしにしない

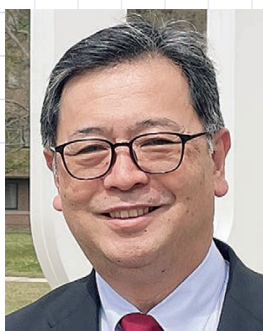


武島 幸男 大学院医系科学研究科 医学分野 病理学 教授

座右の銘を書くよう依頼されたものの、長年、大学で研究、教育、診療を行ってきましたが、「座右の銘」というほどの大した銘に従って大学生生活を送ってきたわけではありませんので、困ってしまいました。しかし、この間大切にしてきたこととして「課題を先延ばしにしない」ということが挙げられます。たとえば、日々の病理診断では、診断は症例を拝受したその日の内に行う。学生教育では、講義、実習などのコンテンツは、少なくとも2週間前には作成を終わらせる。研究では、自分たちのテーマ（特に中皮腫の病理診断・遺伝子異常など）に係る論文や情報に常にアンテナを張り、よい研究の方向性を示すようなものが見つければ、すぐに実践するなどの努力を行ってきましたし、教室のスタッフにもそのようにするように促してきました。当たり前のようなことばかりですが、これを実行するのはかなりの努力が必要であり、実際にはできていないことも多くあります。しかし、早めに仕事を終わらせれば、残った時間で更に新しいことにチャレンジすることもできます。

これからの将来を担っていく若い世代の人たちも、是非、「課題を先延ばしにしない」ということを実践してみてはいかがでしょうか。きっと、心に余裕が生まれて、良い研究や診療ができるようになるのではないのでしょうか。ちなみに、これを実行するために、私は朝方生活に徹していて、午前5時には仕事をスタートしています。

実るほど頭を垂れる稲穂かな



津賀 一弘 理事・副学長（社会連携・基金・校友会担当）
大学院医系科学研究科 歯学分野 先端歯科補綴学 教授

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」——さて、たいして実ってはいない私ですが、できるだけ謙虚でありたいと思い、この言葉を座右の銘としています。時に慰撫無礼と訝られることもあるかもしれませんが、ご容赦ください。

かつて私は、生意気な若手教員でした。臨床実習では、学生の些細な至らなさに厳しく当たり、怒ったことも多々ありました。当時の学生にとって、私は一触即発の危険な存在だったことでしょう。同窓会では、「先生、随分まるくなりましたね」と言われます。

30歳の時、Dale Carnegieの『人を動かす』を読み、できるだけ人と争わないようにしようと決めました。初対面の人はもちろん、顔馴染みの同僚にも、言葉遣いから丁寧に接することを心がけています。もしかすると、それは自信のなさの裏返しだったのかもしれませんが。

気づけば、優れた先輩・同僚・後輩を心からリスペクトできるようになった気がします。さらに、教室・大学内外の多くの方々との支援のおかげで、「口腔機能低下症」という新しい歯科病名の創設に参画し、開発した「舌圧検査」も社会保険診療に採択され、全国の歯科医院で活用されるようになりました。微力な私を支えてくださる多くの人々のおかげで仕事が進んだと、実感しています。

人との関わりの中で育てられ、支えられ、ようやくここまで歩んできました。これからも感謝を忘れず、誰かの役に立てるよう、努力を続けていきたいと思っています。